

2013年度ゼミ論文

華人ニューカマーによるエスニックコミュニティの郊外化
—埼玉県川口市 芝園地区における地域変容—

早稲田大学

文化構想学部

社会構築論系

地域・都市論ゼミ2(コミュニティ論)

1T100579-7

藺田 悠

目次

第一章.研究概要	p.2
1-1.研究背景・問題意識	
1-2.研究目的・課題	
1-3.研究方法	
1-4論文構成	
第二章.日本における在日中国人に関する先行研究	p.5
2-1.華僑・華人に関する研究	
2-2.老華僑たちの築いたコミュニティ	
2-3.新華僑によるコミュニティ形成	
2-4.まとめ	
第三章.研究対象地『埼玉県川口市芝園地区』に関する先行研究	p.9
3-1.川口市の概要・歴史	
3-2.芝園地区の概要・歴史	
3-3.芝園団地の現況・問題点	
3-4.芝園団地内のコミュニティ	
第四章.川口市芝園団地における地域変容のメカニズム	p.19
4-1.新華僑の集住化メカニズム	
4-2.日本人の減少	
第五章.ニューカマーの郊外化のメカニズム	p.25
5-1.華人ニューカマーの郊外化の要因	
第六章まとめ	p.27
6-1.論文概略	
6-2.謝辞	
6-3.本研究の意義	
参考文献リスト	p.31

第一章.研究概要

第一章では論文の本論に入る前に、本研究に至るまでの経緯および問題意識、また研究目的やその方法、論文の構成について論じていく。

1-1.研究背景・問題意識

国際化社会の到来は日本の社会に大きな変化をもたらした。特に地域社会においてはその変化は深刻であり、日本各地でエスニックコミュニティが形成されるのに至った。特に、在日外国人の中で最も多くの割合をしめる中国・台湾人は、横浜や神戸、長崎といった地域で「中華街」と呼ばれるチャイナタウンを形成していった。

そして現代、特に1970年から80年にかけて新たに大きな変化が訪れた。中国本土の開放政策によって、大陸から大量の海外流出者が世界各地に雪崩れ込むようになり、日本も例外ではなく、在日中国人の占める割合が急激に増加した。その中でも特に増えたのが就学生や留学生のグループであり、彼等は日本の大学で専門的な知識を得た後、本国に戻ることなく在留資格を得ることによって、日本の地域社会の中で生活することを選択した。そういった、70年代以降に日本にやってきた中国人・台湾人を「新華僑」、それ以前に日本に住んでいた在日中国人を「老華僑」と区別するようになった。

老華僑が横浜や長崎といった中華街を形成してきたように、新華僑は既存のチャイナタウンやニューカマーのコミュニティに身を寄せる一方で、彼等は新たなエスニックコミュニティを形成するに至った。代表的なものが、池袋や新大久保といった都内に位置するものであり地域社会に変容をもたらしている。

そしてそういった新華僑は都内のみにコミュニティを形成するのではなく、広く首都圏内に新たなコミュニティを築いていった。これが新華僑の新たな集住化の傾向である、「エスニックコミュニティの郊外化」である。その代表例として本論文で取り上げるのが、埼玉県川口市に位置する「芝園団地」である。

埼玉県川口市芝園地区に位置する「芝園団地」は、新華僑を中心とした中国人の集住化が近年になって進んでいる地域の1つである。その割合は22.6%と、首都圏有数の集住地帯となっている。芝園地区に住む中国人のほとんどは、UR 賃貸住宅の芝園団地で生活し、そこで中国本土と変わらない生活様式で暮らしている。

また、彼等は団地内の中国人同士でコミュニティを築き上げているため、日本人のコミュニティに溶け込もうとはしない。ゴミの不法投棄や、壁面への落書きといった問題が恒常化しているため、周囲の住民の理解が得られていないという状態にある。

1970年代以降日本にやってきた新華僑たちは、地域社会に暮らしながらも地域に溶け込

もうとはせずに、そこで独自のコミュニティを築き上げた。そして団地内では不自由なく暮らしていくことが可能になっている。しかし、この地域では多くの課題が残されている。芝園に住む日本人は、同じ地域内に住む中国人の勝手な振る舞いに頭を悩ませている状況に変わりはない。また、芝園団地は老朽化が進み、防災の面では対策に非常に遅れが出ているという現状にある。地域の中に存在しながら、周りの地域住民とは交流を取ろうとはしない、いわば「ゲットー」が形成されてしまっている状態と言わざるを得ない状態にあるだろう。

本研究では、芝園地区が現在の状況に至るまでの過程、また現況のメカニズムを解明すること、また芝園も含めたニューカマーの郊外化のメカニズムを解明することを目的としたい。

1-2.研究目的・課題

本論文においては以下の三点を研究課題とする。

- ①埼玉県川口市芝園地域の地域変容のメカニズムの解明
- ②ニューカマーの集住化・郊外化に関するメカニズムの解明
- ③団地内におけるコミュニティの解明(これについては考え中)

まず初めに1に関しては、研究対象自治体である芝園団地を中心とした周辺区域一帯の地域変容、またその変容のメカニズムの解明を目標とする。

2に関しては、本論文を芝園地区の地域研究のみで終わらせるのではなく、今後の新華僑によるエスニックコミュニティの郊外化に関するメカニズムを解明するという課題を設定する。在日中国人が今後も増加傾向にあることを考慮すると、エスニックコミュニティが首都圏各地に誕生することが予想できる。そういった社会背景の存在から、この研究は非常に意義を持っていると判断し、研究目的に設定した。

3の団地内におけるコミュニティ研究は、芝園団地内において活発なコミュニティ活動はほとんど行われていないが、以前からある程度の活動は確認されている。そういった活動は、どのように運営されているのか、またなぜ現在、中国人が日本人の活動に参加したがるのか、その点について詳しく追求していきたい。

また本論文は、在日外国人の研究や移民政策にフォーカスを置いた研究ではなく、あくまでニューカマーの到来によるエスニックコミュニティの誕生がもたらした地域変容に主軸を置いた研究であることを留意していただきたい。

1-3.研究方法

前項で論述した①の川口市芝園地域の地域変容のメカニズムの解明に関しては、行政の公開している資料を用いながら、事前に調査地の先行研究を行った上で、地域変容や人口

移動に関する文献研究を行っていく。

②に関しては、在日中国人、その中でも論文の中核である新華僑の研究や、ニューカマーに関する基礎的な文献研究を行った上で、①で研究した事例と照らし合わせながら集住化・郊外化のメカニズムを研究していく。

③の芝園団地におけるコミュニティ調査に関しては、新聞や雑誌記事を用いて事前調査を行った上で、コミュニティ内部に存在するいくつかの団体へ聞き取り調査を行った。

1-4.論文構成

第一章で本論文の研究概要を踏まえた上で、第二章から本論を記述していく。第二章・第三章は先行研究として、在日中国人・ニューカマーの研究、また研究対象地である川口市芝園に関する研究やデータについて論じていく。

第四章は研究目的の①、③に該当する箇所として、芝園団地の内部コミュニティ調査の結果を述べた上で、芝園団地が80年台以降中国人の町へと変化していったその歴史過程とメカニズムに関して論じていく。

第五章では第四章を踏まえて、新華僑と呼ばれる在日中国人のコミュニティが、芝園団地といった郊外の町へと集住化するのに至ったのか、その背景とメカニズムについて論じていく。

第六章は本論文の構成・謝辞・本論文の意義を論じまとめとする。

第二章.日本における在日中国人に関する先行研究

第二章では先行研究として、本論文の中核のアクターとなる在日中国人、その中でも『新華僑』と呼ばれるグループの中国人に関する研究結果を論じていく。

2-1.華僑・華人に関する研究

現代日本において在日中国人のあり方は極めて多様化しており、その中国人の持つ特性によって呼ばれ方が大きく異なっている。その代表的なものとして「華僑」と「華人」の2つがあるが、この2つは混同されやすい。ここでは華僑に関する記述の前に、この2つの違いについて述べておきたい。

古くから海外に移住した中国人のことは、古くから「華僑」と呼ばれていた。この二文字が現れたのは1894年頃前後であり(菅原幸助,1991,pp.7)、「僑」の字には仮の住まいという意味がある。海外で暮らしながらも国籍は中国に置き、いずれは中国本土へ帰る気である中国人を厳密には「華僑」と呼んでいた。第二次世界対戦前にはこの考えは一般的であり、当時海外で生活する中国人のほとんどが「華僑」的な特徴を持ち合わせていた。

しかし大戦後、社会主義化など中国を取り巻く状況が変化したことをきっかけに、それまで海外で生活していた「華僑」たちの中には、中国本土に戻ることに無くその地で国籍を取得する者が現れ始めた。こういった、中国本土で生まれ、その後海外に移り住みそこで国籍を得た中国人を「華人」と称するようになった。中国では、海外にする中国人を「華僑」と「華人」で区別する。中国の急速な近代化に伴い、国外に多様な理由で在住することになった中国人が増加したため、彼等の生活像を的確にとらえるために、中国で誕生した呼び名である(譚?美、劉傑,2008,pp.157-158)。

以上をまとめると、中国に国籍を置き、海外で生活している中国人を「華僑」、すでに海外で国籍を取得した中国人、中国に国籍を置いているが、完全に海外に生活の基盤を置いている中国人を「華人」と呼ぶ。

次に老華僑と新華僑について説明する。

元々は中国大陸出身の在日中国人を「旧華僑」、第二次世界大戦後に中国籍を回復した台湾出身の在日中国人を「新華僑」と呼び分けをしていたが、現代の日本では別の意味をもっている。今日において新華僑とは、80年代以降に日本にやってきた中国・台湾人を指す。それ以前から日本に暮らしていた中国人を老華僑と呼ぶ。1970年代、日本へとやってくる中国人が増えたのには、中国政府の開放政策と日本の改革の2つが大きく関係している。1984年中国政府は「私費留学生の出国に関する暫時規定」を交付、これによって日本の教育機関への留学が非常に容易なものとなった。また日本においては1983年「留学生10万人

計画」を開始、留学生の増加を招いた(山下清海,2011,pp.191-pp.192)。

それ以前は、日本で生活をできる中国人はほんの一握りしかおらず、彼等は金銭的事情・政策の関係上から日本へ渡ることすらできず、また日本へ来られたとしても、在留資格を得るのは極めて困難であった。

しかし、80年代以降に誕生した新華僑たちは、そういったイメージからは離れた存在であった。中国内でも比較的裕福な家庭で育った彼等は、就学や留学を目的に日本にやってくるのが主であった。彼等は大学院で専門的知識を得た後、日本の企業の技術職に就くことが多い。当然彼等は「華僑」であるため、国籍を日本に移すことはなく、在留資格を獲得しながら生活している。

2-2.老華僑たちの築いたコミュニティ

中国から日本へとやってきた華僑達が日本で初めて築いたのが、長崎・神戸・横浜の三大中華街とよばれる町である。

江戸時代、日本で最も早く誕生した長崎新地中華街は、当時の国策や貿易の制度が大きく関係している。江戸時代に鎖国によって唯一の貿易港となった長崎では、当時から中国人が唐人屋敷と呼ばれる中国人の居住区に住みながら貿易を行った。1858年、日米修好通商条約をきっかけに長崎が開放され、唐人屋敷の必要が無くなった後、そこに住む中国人が築き上げたのが、現在の長崎新地中華街である。鎖国時に唯一の貿易港であったことから、他のチャイナタウンよりも長い歴史をもっているのである。

先述した日米修好通商条約によって日本の本格的な国際貿易が始まり、1859年最も早く開港したのが横浜港であった。そこにやってきた多くの外国人は居留地に留まり続けながら商売を続けた。その居留地こそが現在の横浜中華街であり、彼等はその地の一角に中国人館や関帝廟といった建造物を建てていった。1871年日清修好条規が結ばれたことにより、居留地以外の地に住むことが可能になった後も、中国人を始めとする外国人はその地を動くことなく、異国さながらの街を形成していった。中国人の割合が増えていったのは1900年代以降のことであり、それからは中国人の経営する飲食店等が増加していった。関東大震災や日中戦争がきっかけで、この地を去る中国人を始めとする外国人も増加したものの、結果的には中国人が残ることとなり、この土地は横浜中華街として現在へと繋がった。

以上の2つとは異なり、居住地ではなく商業地として発展したのが、神戸のチャイナタウンである南京町である。1868年神戸港が開港し、多くの外国人がやってきたが、その中でも日本と条約を結んでいなかった清国出身の外国人は居住区に住むことを許されず、多くがその隣りの雑居地へと住まいを移していった。しかし1945年、神戸大空襲によって南京町一帯

は焼け野原となり、外国人バーや闇市が立ち並ぶ一帯へと変化していった。現在の中華街を形成するのにおいて大きなきっかけとなったのは1981年、南京町復興環境整備事業実施計画の策定であり、他の地域に存在していた中華料理店が移転し、現在の南京町中華街を形成していくのに至った。以上が華僑の中でも、老華僑がルーツとなっている中国人のエスニックコミュニティである。

2-3.新華僑によるコミュニティ形成

それでは70年代以降急激に増加した新華僑たちは、地域社会でのどのように生活していたのだろうか。それまでの日本には老華僑達によって形成された三大中華街といったエスニックコミュニティが存在していた。新華僑達が初めに住み始めたのはそういった既存の中国人コミュニティである。彼等の中にはそこに住居を固める者はもちろん、そこで商売を始める者もいた。

しかし、一部の新華僑たちは既存のコミュニティに属するのではなく、新たなコミュニティを築き上げそこで集住を始めた。代表的なのが新大久保や池袋北口にある、現在「池袋チャイナタウン」と呼ばれる地域である。しかし、なぜ彼等は池袋に新たなエスニックコミュニティを築いていったのか。そこには、新華僑と呼ばれるグループの特性が大きく関係している。第1節で触れたように、70年から80年代に増加した新華僑たちは留学を目的とした来日が多くを占めていた。池袋には当時から日本語学校が存在し、また両店外という立地上、飲食店アルバイト先も多く、ターミナル駅からの徒歩圏内にアパートが複数存在する等、留学生にはうってつけの土地だった。新大久保も同様に、外国人の働きやすいアルバイト先が多いこと、また外国人も住みやすい住居が多数存在していたことから、新華僑を多く受け入れていった。特に池袋は90年代から中国人が急激に増加し、00年代には一大エスニックコミュニティを築き上げていった。それが現在の『池袋チャイナタウン』と呼ばれる、池袋駅北口の一部地域である。

しかし80年代以降、池袋チャイナタウンの形成とは他に、新たな変化が起きる。その変化とは新華僑の住むコミュニティの郊外化・集住化である。日本の教育機関を卒業し、日本の企業、その中でも専門的知識を必要とする技術職に就いた新華僑は、金銭を獲得したことによって比較的裕福となった。そして彼等はよりよい住環境を求めて都内の喧騒から離れるように、都内の中心地とは別の地域に集住化を始めたのだった。しかし就労ビザで日本に滞在している華僑には通常の賃貸マンションに住むのは困難であったため、彼等は比較的楽な条件で入居ができ、かつ首都圏近郊の賃金の安い住宅を求めるようになった。そして新華僑の求める条件に合致したのが、郊外に位置する過疎化の進んだ集合住宅であった。郊外

という落ち着いた環境と、首都圏への交通の良さを兼ね備える郊外の住宅は、老朽化や過疎化という要素を持ちながらも、新華僑にとっては十分条件を満たすものであり、首都圏に勤務地を持つ彼等によっては都合が良いものであった。集住化減少が起きている代表的な団地が、埼玉県川口市に位置するUR 賃貸住宅川口芝園、通称芝園団地である。神奈川県大和市と横浜市の境に位置する県営いちょう団地のように、多国籍の外国人が集住する団地とは異なり、芝園団地は中国人、その中でも新華僑と呼ばれる若い中国人達の集住化が起きている団地である。中国人の集住する団地としては首都圏でも有数であり、住民の40%近くが中国人という数値を出している。

2-4.まとめ

以上、第二章で論じてきた在日中国人に関する先行研究の結果、次の要素が明らかとなった。

在日中国人の中でも、80年代以降に日本へとやってきた中国人を「新華僑」、それ以前から日本で生活をしてきた在日中国人を「老華僑」と区別し、特に首都圏における新興エスニックコミュニティを担っているのは新華僑のグループに該当する。老華僑が三大中華街を始めとする既存のコミュニティに留まる中で、80年代以降急激に増加した新華僑達は、自身の目的や生活様式に合致した、新しい地域へと生活圏を拡大させていった。それらの新しい生活圏から、新華僑の持つ特性が明らかとなった。

1つは彼等は留学を目的として日本へとやってきた後、日本の企業に就職をしている点である。新華僑達は就学・就労を目的として日本へやってきた後、留学先・勤務地を首都圏へと設定し、自ずと生活圏は首都圏になった。そして彼等は横浜中華街を始めとする既存のエスニックコミュニティへと身を寄せるのではなく、池袋北口という新しい地を選んだ。日本語学校やアルバイトに適した飲食店の多いこの街は、留学生である新華僑にとっては住みやすい土地であると言える。

2つは、彼等は従来の在日外国人と比較すると、裕福な生活をしている点である。日本の大学院を卒業し、首都圏に勤務地を持つ企業で正規雇用として働く彼等は、比較的高収入の層が多い。その収入に見合った、よりよい住環境を求めた結果、彼等は郊外に位置する、入居条件の軽い集合住宅に目をつけた。その条件に合った住宅こそが、本論文で取り上げる川口市芝園町に位置する団地、川口芝園団地であった。70年代に建設された芝園団地は、当時は人気の住宅であり、抽選のみで入居者を募集するほどだったが、現在は人口流出が進み、過疎化の問題も発生している。その中で中国人の集住減少が始まり、一種のチャイナタウンとしても存在するほどに至った。

第三章.研究対象地『埼玉県川口市芝園地区』に関する先行研究

第三章では先行研究として、本論文の研究対象地である埼玉県川口市芝園地区に関する先行研究、また芝園地区内に存在する団地である芝園団地に関する先行研究結果について論じていく。

また、芝園町の概要に関しては、聞き取り調査に基づいた現況や問題点に関してを論じていく。

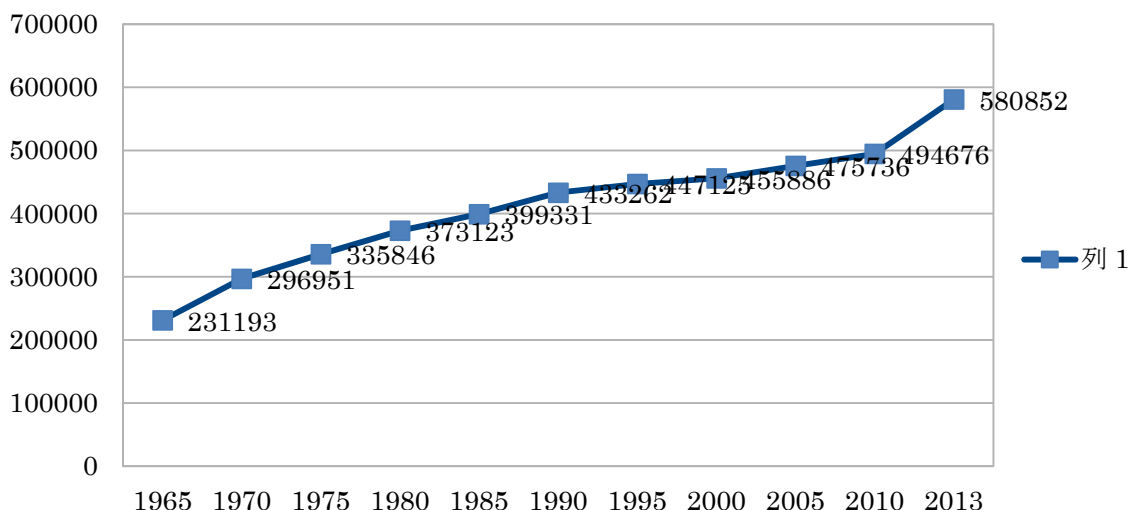
3-1.川口市の概要・歴史

埼玉県川口市は、県南部に位置する、人口57万人を有する特例市である。面積は61.97平方キロメートル、県内64市町村中18番目の広さとなる。東京都をはじめ、さいたま市や蕨市、草加市と隣接しており、また都心からのアクセスの良さから、高度経済成長期からベッドタウンとしての性格が非常に強い自治体である。市内でも地域ごとに大きく特徴が異なっており、京浜東北線川口駅のある市の西部には高層マンションや住宅地が多く、人口が集中している地域である。中央部には、第三セクターの鉄道会社が運営する埼玉高速鉄道が位置し、2000年以降開発が進んでいる。東部の安行・戸塚地区は植木業が盛んな地域であり、未だに緑を多く残していることから、住宅地としての人気が高い。南部に位置する新郷地区は、市内や近隣の市街地に本社を持つ会社の工場が多く位置する、工業団地となっている。2013年現在は埼玉高速鉄道線の沿線部である、中央部から東部にかけての開発が大きく進んでいる。2011年には隣接していた鳩ヶ谷市を吸収合併したことにより、さらに人口増加を速めていくこととなった。

面積	61.97平方キロメートル
人口	580,852人
高齢者数	92,227 人
高齢化率	15.99 %
世帯数	260,715世帯
人口密度	9,100人/km ²

次に人口の推移について説明していく。以下が人口の推移を示したグラフである。

図1.埼玉県川口市の人口推移



以上グラフにあるように、1965年の高度経済成長期以降、順調に人口を伸ばし続けている。2011年には鳩ヶ谷市を吸収合併したことにより、60,000人近い人口が加わったことによって、人口50万人を超える特例市となった。

次に川口市が現在に至るまでの歴史的概要について押さえる。

市の明確な起源は不明であるが、川口市が地域として発展するのは、徳川幕府による江戸時代の到来以降である。日光へと通ずる御成道の宿駅の一つである「川口宿」となったため、江戸との密接な関係が生まれることとなった。荒川を通して江戸へと供給するための鋳物業や織物業、釣竿製造が地場産業として発展した。地場産業はそれ以降も、その次代の地域や国家の需要に合わせて対応しながら発展を続けてきた。

そういった中で川口市に著しい変化が起きたのは1960年代に入った辺りの頃であった。50年代に一時期、高度経済成長期による特需によって地場産業の1つである鋳物づくりが盛り上がりを見せたものの、60年代に入ると生産量は著しく下降し、鋳物工場の倒産が相次いだ。1964年には187件、65年には44件の工場が倒産し、川口における鋳物の役割は低下の一途をたどった。

そして同時期にもう一つ新たな変化が起きる。それは、川口市の急激なベッドタウン化である。東京への人口増加の結果、よりよい住環境を求めていき、オーバーフローのような形式

で隣接している川口市に人口が集まっていった。また、川口市の人口増加は、地場産業に新たな影響を与えていった。川口の鋳物づくりの象徴である鉄類の溶解炉『キューポラ』は、細かなコークスのゴミや噴煙をまき散らすものとして、次第に地域住民から敬遠されるようになった。もともと地場産業として住民の理解を得ていたものが、快適な住環境を求める新たな市民との間に軋轢を生むものへと変化していった。このことをさらなるきっかけとして、川口駅周辺にあった鋳物工場は市外地へと移転し、駅前には高層マンションの立ち並ぶ現在の川口市の姿へと変化していった。

以上が川口市の歴史的概要である。

3-2. 芝園町の概要・歴史

芝園町は埼玉県川口市西部に位置する町である。市の西部、JR 京浜東北線蕨駅から徒歩数分の所に位置している。最も大きな特徴としては、地域内に一戸建ての住居はまったくと言っていいほど存在せず、町内の住居の大半を、UR の賃貸住宅である団地がほぼ占めている。2013年現在、5,089人、2,930世帯が暮らしている。そしてその内、2,186人の外国人が地域内で暮らしており、団地内の半数近くが中国人で占められているということになる。人口全体は減少傾向にあり、2008年には地区内に存在していた川口市立芝園小学校が閉鎖、2013年に川口市市立芝園中学校が同様の理由で閉鎖している。しかし、地域内にはスーパーマーケット、歯科医院、郵便局と生活に必要な施設が多く整っており、また地域外のすぐ近くに小中学校が揃っているため、比較的住みやすい地域ではある。

芝園町の明確な歴史起源は不明ではあるが、江戸時代からそのルーツを辿ることが出来る。芝園町はかつて、現在の埼玉県川口市西部に存在していた芝村の一部であった。江戸時代に新田開発と治水を目的として造られた、見沼代用水が芝村内を通過していたことから、当時から農業が盛んな地域であった。1940年、川口市に編入したことにより芝村は消滅。旧芝村はそれぞれ名称を新しくし、芝園町と新しく名付けられた。元々農業が盛んであったこの地に大きな変化が訪れたのは、1934年、芝村が日本車輛製造の工場を誘致したことから始まった。元々農業が盛んであったこの地へと工場を誘致することは、雇用や駅の整備といった様々な恩恵を期待できるものであった。そのため、芝村は躍起になって誘致活動をし、工場建設を成功させた。それ以降、1945年に工場の火災事故が発生したものの、それ以外には大きな変化はおきず、芝園町はあくまでも日本車輛製造の巨大工場を有する、産業の町として存在しつづけた。しかし、1970年代に入ると景気悪化を理由に工場が取り壊され、芝園町に巨大な空き地が誕生するのに至った。そして、その空き地が日本住宅公団によって買い取られ芝園団地の建設が決定した。

1970年代当時埼玉県南部地区は、急速な都市化を遂げた東京都に対して、ベッドタウンとしての需要が大きく高まっていた。ベッドタウン化に際しての住宅開発は、埼玉県とい東京都を跨ぐ鉄道沿線沿いの地域が特に顕著であり、60年代には東武伊勢崎線沿線に武里団地と松原団地という巨大団地がすでに誕生していた。70年代に入っても新しい住宅の需要は高く、その需要は京浜東北線沿いの埼玉県川口市も例外ではなかった。川口駅東口周辺に多く存在していた、地場産業の鋳物工場は市外や同市東南の新郷地区に移転をし、代わりに誕生した駅前の土地にはマンションや住宅地が建設されていった。そういった状況下において、日本住宅公団が目をつけたのが、工場の倒産によって広い空地が誕生した、川口市芝園町であった。1972年から建設工事が開始し、現在の10～15階建の高層マンモス団地、芝園団地が誕生した。

そしてこの芝園団地が現在、抱えている最も大きな問題こそが、先述してきた中国人の集住化と、それに伴う住民トラブルである。中国人住民の集住化は90年代から開始し、在日中国人の中でも「新華僑」と呼ばれる比較的若い年代層の集住化が、芝園団地における大きな特徴である。

次項からヒアリング調査の結果を中心にした、芝園団地のコミュニティと現在の問題点に関して詳細に論じていく。



図2. 埼玉県川口市芝園町の地図



図3.埼玉県川口市芝園町の位置

3-3.芝園団地の現況・問題点

まず初めに、芝園団地に住む住民の特徴を抑えておきたい。日本人住民の特徴として、高齢化が進んでいることが第一に挙げられる。1978年に完成した芝園団地は、完成当時は新しく快適な住居として人気が高かった。しかし、次第に人口の減少が始まり、2013年現在は空室が目立つほどへと人気が低下していった。理由としてはいくつか存在し、最も大きな理由は団地の老朽化である。加えて、京浜東北線川口駅を周辺とする地域の開発が進み、住みやすいマンションが周辺地域で増えていったことや、都心のマンション価格の低下が起きたことから、人口が周囲のマンションへと流出したことが、人口減少の原因である。元々川口市、および芝園町は首都圏へのアクセスの良い、ベッドタウンとしての性格を強く持つ開

発が進んでいたため、周辺地域の新しいマンションの開発や、都内の住環境向上・マンション価格の低下といった変化に弱く、人口流出を防ぐことが出来なかった。芝園町最寄りの蕨駅を擁する京浜東北線沿いの開発のみでなく、2001年に開通した埼玉高速鉄道線沿線である川口市中央部や東部の開発も顕著であり、駅前には賃貸マンションが建設される等、芝園団地周辺の開発が顕著になるにつれて、人口流出数は増加の一途をたどった。加えて2LDKの狭い造りが中心であることが、子どもを持つ夫婦にとっては理想的な条件とは言いがたく、人気の低下へと繋がってしまった。

具体的な問題も発生し、単身高齢者が孤独死するケースが相次ぐなど、高齢化・人口減少は大きな問題となりつつある。また、若年層の団地離れも顕著であり、芝園町内に存在した小中学校は2つとも閉校し、現在は私設の幼稚園と保育所のみを有する程度へと縮小してしまっている。

次に外国人住民の特徴について述べていく。先述してきた様に、芝園団地に住む外国人の90%以上を中国人、その中でも80年代以降に日本へとやってきた新華僑のグループが占めているのが大きな特徴である。元々修学目的で日本の地を踏んだ彼等は、日本の大学を卒業後、学んだ技術を活かすことのできる日本の企業へと就職をした。そして、より良い住環境を求めてこの地を訪れたのである。日常生活に必要なものが敷地内でほとんど揃うこの芝園地区は、都内の喧騒と比較すれば、外国人には住み良い環境と言えるだろう。

外国人住民を多く有する芝園団地においては、この団地特有の多くの問題を抱えている。その最も代表的な問題例は、外国人住民と日本人住民との間に発生するトラブルである。芝園団地の敷地内には、駐輪場や公園、ゴミの収集スペース等に中国語と日本語による、UR都市機構作成の張り紙が設置されており、それぞれ別の注意喚起を目的としている。駐輪場の張り紙に関しては、それぞれの棟の一階部分に設置されている駐輪場ほぼ全てに設置されている。駐輪場の使用状態は慢性的に悪く、自転車は並べられることなく乱雑に放置されているような状態にある。芝園団地内とその周辺地域に生活に必要なインフラが揃っている芝園団地において、自転車は生活上必須なものであり、住民の所有数も非常に多い。また、中国人住民にとっても自転車は生活において必要なものではあるが、駐輪場に並べて管理しようとする意識は日本人住民と比較すると低く、結果としてトラブルを招く原因となっている。中国人住民による管理の不徹底と共に、駐輪場そのもののスペースの問題も同時に存在する。既存の駐輪スペースでは到底すべての自転車を収容することはできず、結果として歩道へと自転車があふれる結果へと繋がっており、問題解決へはほど遠い。共同のコミュニティスペースや、ベンチの周辺のポスターとして目立つのは、大声での会話を禁ずる内容を記した物である。このポスターが設置されるようになった理由には、中国人が大声で

会話をする声を、日本人の住民が中国人同士の喧嘩だと勘違いして通報してしまうというケースが相次いだことに由来する。それぞれの住居が狭く、集団で集まるには適さない間取りの芝園団地においては、団地敷地内に設置されたコミュニティスペースは、住民同士の交流の場面において非常に重視されている。しかし、その一方で中国人住民がそのスペースを独占し、日本人住民が使用することができないという問題を生み出している。喧嘩と間違えられ通報されるだけでなく、夜間における中国人同士の会話の声も騒音問題としてトラブルの中心となっている。また、芝園団地において最もトラブルの原因となっているのが、ゴミの収集問題である。自治体の指定した分別方法や、集荷日に沿ってゴミを集荷スペースへ持っていくというルールが芝園町では存在し、自治会によって設置されたポスター等を通じて日本人はもちろん、中国人もそのルールを認知している。しかし、ルールを守るのは日本人住民のみで、中国人住民はゴミの分別や集荷日を気にかけることなく、ゴミを集荷スペースに出してしまうことが大きな問題点となっている。集荷日外に生ごみを出すことによって、集荷が遅れるだけでなく、中国人の使用する食材や調味料の特徴上、ひどい異臭を放つことから、ポスターを通じてゴミのルールを徹底させるようにする活動は続いている。しかし、中国人は日本のゴミにまつわるルールは決して守ろうとはせず、結果としては住民ボランティアがゴミの分別を行ったり、集荷日までゴミが放置されていたりと、

もちろん、こういった問題が複数浮上していることから、芝園団地を管理するUR都市機構もいくつかの対応を行っている。例えば、先述した中国人が共同スペースを独占する問題においては、ポスターのみを設置するだけでは効果がなく、最終的に立ち入り禁止にする処置をUR都市機構はとった。閉鎖したスペースは、中国人の少年が団地の壁にボールあてをし、ポスターによる注意喚起を行ってきたが効果が無く、閉鎖を余儀なくされた。

以上述べてきた問題点から、次の事柄を論じることが可能である。ポスターによる注意喚起を必要としている問題は、すべて日本人と中国人の生活様式の差異から発生している。中国人は依然として、自身の文化や生活様式を変えようとすることなく生活を続けており、それらが結果として日本人住民とのトラブルを生み出すきっかけとなっている。また、こういった問題は芝園団地のインフラも大きく影響している。駐輪スペースは元々、現在のような増えすぎた自転車を収めることが可能なほど広くはなく、また公共スペースの問題も、そのスペースが住宅棟と隣接した所にしか設置することが出来ないことから、騒音問題として発展してしまっている。芝園におけるコミュニティ問題は団地外へと影響を及ぼしている。隣接している西川口がかつて首都圏有数の風俗街であったことから、蕨・西川口周辺が不法滞在の在日外国人の街というイメージがひとり歩きするようになり、地域のイメージを下げると共に、過激派団体によるデモ活動が多発するなど、新たな問題が外部からの影響で発生始めている。

3-4.芝園団地内のコミュニティ

前項で述べてきたように、現在中国人の集住化が発生している芝園団地では、日本人住民と中国人住民との間にトラブルが発生している。それらの問題は、中国人住民達の生活様式や文化が、芝園団地の規則や日本人住民の生活様式と合致しておらず、発生してしまった問題が多い。また、芝園団地の立地や構造にも問題があり、増えすぎた中国人住民に対応できていないことが、問題を発生させている要因となっている。

こういった現状にある一方で、日本人と中国人の住民間に友好的な関係がまったく築かれていないというわけではなく、ごく小規模ではあるがコミュニティが存在している。公民館が主催している、日舞の体験教室や中国語講座は複数の中国人が参加し、日本人住民と積極的な交流活動を行っている。日舞の体験教室には、特に中国人たちの子女が強い興味を抱き、親子での参加が多い。中国語の教室は、中国人夫婦との間に生まれた子女が通っている。日舞教室に関しては、日本文化への単純な興味や和服を実際に着ることが人気であるのに対し、中国語教室は体験のような要素から大きく外れた、本格的な習得を目的とした中国人の子女が多く参加する。自身の子どもを中国語教室に通わせる中国人夫婦のねらいには、将来的に本国へと帰る際に、問題なく中国でも生活することが可能にするためである。両親共に中国人であっても、日常的に日本語に触れる上、幼稚園・小学校では日本語を使うことが余儀なくされるため、中国語を話すことが出来ない中国人の子どもは芝園団地に多い。子女教育に非常に強い関心をもつ芝園団地の中国人達は、将来的に日本ではなく中国へと子どもを住まわすか、家族ごと再び中国へと戻るケースが多く、そのためには中国語の習得が必要不可欠であり、都内の中国語教室へ子どもを通わせる家庭も存在するほどである。

2013年には芝園団地商店会による主催事業である『ニーハオ芝園フェスタ』が開催された。日本人の外部団体による京劇や、中国の伝統芸能である京劇が開催されたりと、日本人と中国人との橋渡しとなるイベントであった。また、この事業にはUR都市機構も参加し、ゴミ出し・分別の啓蒙活動を行ったりと、芝園団地のマナー向上化に一役を買った。当然このイベントには多くの中国人住民が参加し、コミュニティの結束力の向上が見られるかのように思えた。

しかし、あくまでも日本人団体主催の事業のみに中国人が参加するのであって、その他の活動で中国人が日本人と共に交流する機会は非常に少ない。芝園町公民館では公民館のスペースを貸し出し、サークル活動を行うことが可能であるが、日本人と中国人は別々の団体を造り、それぞれ活動しているのが2013年の実状である。公民館主催で、日本人・中国人の両団体が交流できるよう、「レクレーション会」といった催し事を開催してはいるが、参加し

ている中国人団体は、たった一団体と、積極的な交流は行われていない。中国人が参加するのは、あくまでも自身の興味関心に沿った内容の活動のみであり、日本人との交流に重きを置いていないことが、この現状から伺うことができる。

日本人と中国人との合同コミュニティづくりの難しさは、公民館での活動だけではなく、芝園団地自治会の加入者数においても如実に現れている。芝園団地自治会へ加入し、活動に参加している中国人は1世帯しかおらず、自治会は中国人に歩み寄ろうとしても、それが不可能な状態にある。中国語教室のケースで示したように、中国人家庭のいくつかは、子女教育のため中国へと家族で引き返す他、日本以外の海外へと移住してしまうようなケースも存在し、会費を払ってまで自治会へ参加しようとする意識が低い。加えて、町内会や自治会という、日本のルールに馴染むことの出来ない中国人が多いのも理由であり、あくまで中国人としての規範に従う芝園団地の中国人住民にとって、自治会への加入は良いものとしては捉えられていない。そのため、自治会への参加を断る中国人の家庭がほとんどであり、日本人との日常的な交流が不可能となってしまう。

以上が芝園団地の抱える問題の概要である。日本人と中国人という2つの民族が同じ地域内で暮らしながらも、日常的な交流や活発なコミュニティ活動は確認されてこなかった。その理由には、お互いの歩み寄りの少なさではなく、中国人住民の関心が、日本人住民の持つ関心と大きく異なっていることや、中国人が自身の規範に従い、あくまでも日本人の規範や団地のルールに積極的に従おうとしないことにあると考えられる。互いの習慣に対しての理解も低く、両民族の共存という形には遠い現状である。また特徴として公民館や自治会は、日本人と中国人との交流をレクリエーション会や自治会の加入といった形で望んでいるのに対し、中国人住民はそういった交流を望まず、中国人同士のコミュニティ造りや子女教育といった、日本人住民とは別の事柄に多くの関心を持ち、共存を望もうとはしていない点が存在する。

第四章.川口市芝園団地における地域変容のメカニズム

第四章では川口市芝園団地内における地域変容と、そのメカニズムに関して論じていく。1980年代以降、日本人の暮らす団地から、外国人の暮らす街へと姿を変貌させていった芝園団地には、華人ニューカマーのもつ特性や、芝園団地の持つ特有性、また日本人を取り巻く社会環境が大きく関わっている。

4-1.新華僑の集住化メカニズム

先述してきた様に、1990年代以降、それまで日本人が暮らしていた芝園団地は外国人、その中でも新華僑と呼ばれる中国人グループの集住化によって大きな変化が起きた。

芝園団地に初めての外国人入居者が現れたのは、1973年と、団地が完成したばかりの頃であった。初の外国人はアメリカ国籍の男性であり、川口市役所の職員として勤める際に、引っ越し先の住居として芝園団地を職員から薦められ、入居したのが始まりだった。しかし、それ以降外国人住民が急激に増えるようなことはなく、1980年代においては依然として集住化現象は発生していなかった。当時は芝園団地自体が抽選で入居者を募集する等、日本人にとっても人気の団地であったため、外国人が入居するのはまだ容易ではなかった。90年代中頃から外国人登録者数は徐々に増え始め、94年に112人だったのが99年には486人、そして2004年には1,168人と人数は劇的に上昇していった(江・山下,2005,pp.41-pp.42)。そして2013年現在、2,186人の外国人が暮らす街となった。

芝園団地への集住のメカニズムには、大きく分けて3つの要因が挙げられる。1つがUR川口芝園の持つ特性が大きく関係している。元々公団住宅は80年代から、外国人を受け入れる体制作りを開始していた。しかし、当時は日本人の入居者も比較的多く、相対して外国人の入居数は非常に少なかった。それが90年代に入り、芝園団地が老朽化等の原因で日本人が減少し始めても、外国人の入居希望者を制限する政策を打ち出そうとはせず、2013年現在もそういったルールは制定されていない。また、UR都市機構は基本的に、入居希望者の国籍は問わず、保証人や敷金が不要、家賃のおよそ3倍から4倍程度の安定した収入さえあれば入居可能であるため、若い新華僑にとっては非常に有り難い存在である。一般的なマンション・アパートに外国人が入居するためには、在留資格のみでは入居が不可能であったり、保証人が必要であったりと、就労ビザを取得しながら生活する中国人にとっては難易度が高いものであり、そういった背景の存在が、芝園団地への入居の人気を高めていると考えられる。

芝園団地の人気の高さは、団地の構造も大きく関係している。部屋の間取りは1LDK、2LDK、3LDKの合計3タイプが存在している。この内、中国人に人気なのは、2LDKと3LDK

である。夫婦で住むことが多い中国人にとって、都内のマンションの間取りは手狭であり、さらにそこに子どもが生まれるとより窮屈なものとなる。しかし、芝園団地の構造であれば、多層窮屈ではあるが、都内の環境と比較すれば理想的なものである。賃料に関しては少し高くもあるが、夫婦で共働きをすれば問題は無い程度の高さであるため、都内の入居条件の軽いマンションに比較しても良い条件が芝園団地が揃っているのである。

また、中国人の集住化が、新たな中国人を呼び寄せるといった特性も存在する。住人の中国人が芝園への入居を決めた理由に、住環境の良さはもちろん、自身と同じ境遇の中国人が多く入居しているのがきっかけとしている者もいる(江・山下,2005,pp.48)。華人社会においては「三縁(血縁・地縁・業縁)」、または「五縁(先述の3つ神縁と物縁を加えた5つ)」に基づいたコミュニティ造りを重視する面が極めて強い。業縁は同業による、神縁は同じ宗教、物縁はその地の特産品による結びつきを示す(江・山下,2005,pp.48)。第三章で記述してきたように、芝園に住む中国人達は、自身の民族文化や生活習慣を、日本人のコミュニティに合わせようとはせず、それらを守りながら生活している。そういった生活を送るのにおいて、同じ中国人達の集まる芝園団地は、非常に暮らしやすい地域であると言える。また芝園団地には、子どもを持った家庭が比較的多いという特徴があり、同じ境遇を持つ者同志、相談しやすいというメリットがある。芝園団地に住む中国人に限らず、子女教育に強い関心を持つ新華僑は非常に多い。芝園の住人達の中でも、子どもを中国語教室に通わせている中国人は、将来子どもの教育のために家族で中国本土へ戻るか、子どもだけを実家へと返し、中国の学校に通わせようとするのが大きな理由である¹。もちろん中国へは帰国せず、子女を日本で育てようという中国人も存在する。彼等も子女教育には熱心であり、子どもを都内の私学へと通わせることも多い。そういった中国人達にとっては、周囲が中国人の家庭ばかりである芝園団地は、ただ地縁という華人ニューカマーの持つ特性の結びつきだけでは説明しきれない、強い安心感のあるコミュニティとして完成されつつある。

3つめの理由には、川口市というベッドタウン的特性と、芝園に住む新華僑たちの職業が大きく関係している。第二章で軽く触れた様に、芝園団地に住む中国人男性の多くは、留学目的でやってきた後、大学を始めとする専門機関を卒業した後、首都圏に勤務地を持つ日本の企業へと就職した。中国人達は日本の大学の中でも、特に積極的に希望したのが、専門的な資格や技術を獲得することが可能となる科学系統の学部、またはそれらに準ずる理系の学部を希望した。理由の1つに、彼等の当時の境遇が大きく関係している。80年代開放政策によって自由な渡航が約束されたが、同時に学ぶことの出来る学問が完全に自由に

¹中国語教室に通わせなくても、周囲には中国人が多く、子どもが日常的に中国語を使用する機会も多いため、芝園団地は理想的な環境であるといえる。

なったわけではなかった。当時初めて日本へ留学にやってきた彼等は、中国の中でも名門大学、その中でも理系の学部に所属している場合がほとんどだった。こういった境遇の彼らが日本への留学に選ばれたのは、将来的には中国へと戻り、学んだ技術を国のために活かしていくことを期待されていたからにはほかならない。彼らが中国で専攻していたのは数学・物理・コンピューターといった科目の他、その3つに加え電気工学と測量の2つを加えた合計5つだった。この5つこそが、政府の指定科目であり、日本へ留学した際にも、この5つを学ぶことが可能な学部への入学者が多くを占めた。しかし、この政府指定科目の決定に対し、当時の留学生からはいくらか反発の動きが出た。数字にすると約57%の学生が留学後自身の専攻を変更している(吉原,2013,pp.284-pp.286)。理由としては、留学後は自身の意思で専攻の変更が可能となったため、その後の興味関心で学問内容を変更したものと考えられる。しかし、専攻を変更した57%の内、ほとんどの学生が先ほどの政府指定科目5つに農学等を加えたおよそ6つの科学系統の専攻を選ぶ等、科学系統の学問の人気は依然として新華僑の中国人達には人気であった。

それでは現在、芝園団地に住む新華僑達はこういった職業層なのか。中国人住民達の職業のアンケート調査によると、IT関係の職業に従事している者が最も多く、続いて技術、貿易、売店、研究、そして旅行の順の人数を示した(江・山下,2005,pp.45)。加えて、芝園団地の入居条件の1つに家賃の3倍から4倍の月収、金額にすると、25万円前後の安定した収入があると考えられる。以上の事実から、芝園団地に住む新華僑は、80年代以降、日本の労働力として流入してきた外国人労働者と比較すると、裕福な層に属している。そういった彼等にとって、芝園の立地や環境は理想的なものである。都内の企業に勤めるのであれば、都内の入居条件の軽いマンションで暮らすことも可能である。しかし、都内には中国人の家族や、在留資格のみで入居可能なマンションは少ない。さらに、在日中国人の比較的多い池袋や、同じく朝鮮系の民族が暮らす新大久保といった地域は、都心という立地上、賃料が非常に高い。たとえ賃料が安い物件があったとしても、1Rタイプのマンションでは将来的に子育てをするのは難しい。そういった条件下において、芝園団地は賃料が都内と比較すると安いだけでなく、間取りも3タイプ存在するため、彼等の求める条件と一致するのである。また、芝園団地は京浜東北線蕨駅から徒歩数分、首都圏へのアクセスも良いため、都内の企業に勤める彼等にとっては立地上も非常に都合が良いのである。

以上をまとめると、芝園への集住化減少には3つの要因がある。1つが、UR賃貸住宅は新しい入居者の獲得のために、外国人の入居を制限する規定を設けておらず、都内に在留資格を持つ外国人が入居できるマンションが少ないため、結果として中国人、その中でも収入の高い新華僑の流入を招いてしまった。2つが、同胞とのネットワークを非常に重視する中国

人の特性が大きく関係している。異郷の地で暮らす者同士、協力関係を築くがために同胞の集まる芝園に地を移す中国人が非常に多い。また、そこに暮らす中国人の多くが家庭をもっており、子女教育に強い関心を持つ彼らが、周囲の中国人家族と子育て等の相談が可能のために、居住地として芝園を選択する。3つめが芝園の持つ立地の特性である。従来の外国人労働者の層とは違い、芝園に住む新華僑達は都内の企業にIT・技術職として就職しているケースが多い。また、中国人の入居できる条件の良いマンションは少なく、収入を得ている彼等はより良い環境を求めて郊外に住むことを望む。そういった条件下において、首都圏へのアクセスも良く、周辺に生活に最低限なインフラの揃った芝園の立地は、彼等にとっては理想的な条件として確立している。以上の3点が、芝園団地における新華僑の集住化の要因である。

4-2.日本人の減少

前項では芝園団地における、中国人の増加を記述してきた。しかし、芝園団地では80年代から90年代にかけて、中国人の集住現象と同時にもう1つの特筆すべき現象が発生した。それが日本人住民の現象である。中国人の集住と同時期に発生したことにより、結果的には芝園団地における中国人住民の割合を高めている。中国人から高い人気を集める一方で、なぜ日本人から敬遠されるのだろうか。

芝園団地における日本人住民の現象は、90年代中盤から顕著なものとして現れてくる。94年に5,780人だった日本人住人の数は次第に減少を続け、2005年には3000人台となり、2013年現在は、2,930人という人数となっている。²

² 埼玉県川口市ホームページ参照 (<http://www.city.kawaguchi.lg.jp/kbn/04013011/04013011.html>)
2013年11月30日閲覧。

図4.芝園団地における日本人住民の推移（94-03）

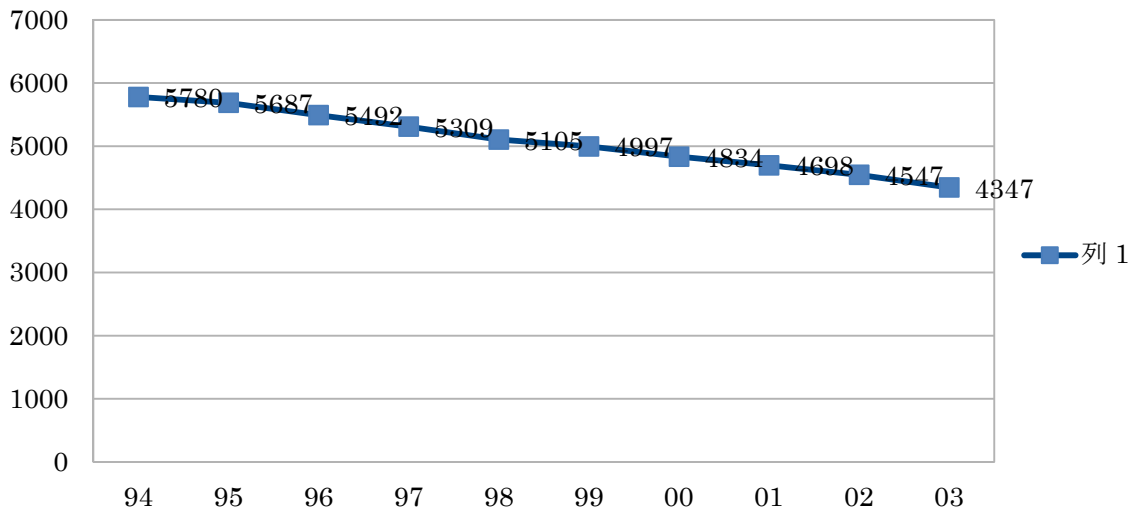
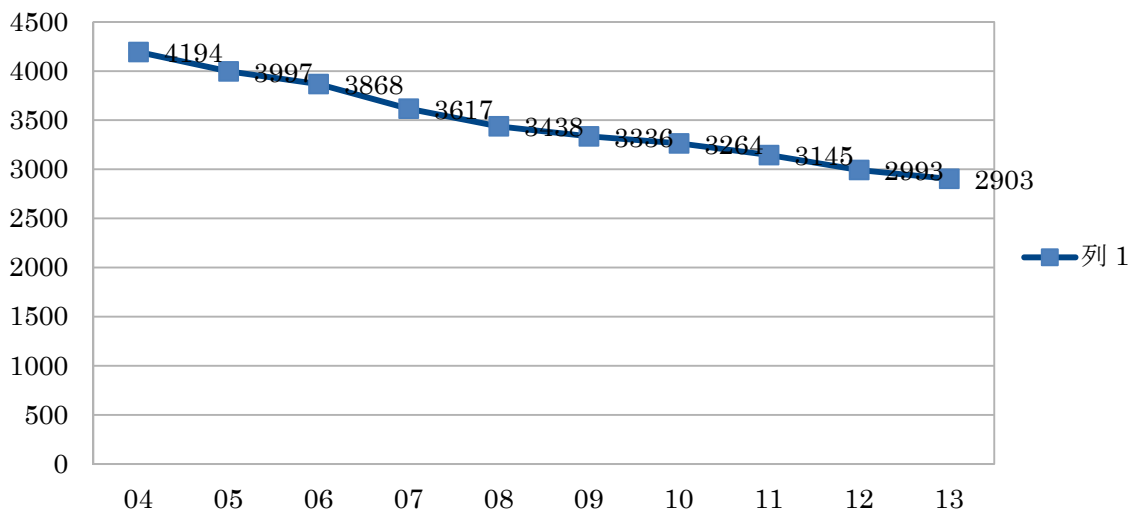


図5.芝園団地における日本人住民の推移（04-13）



日本における団地型住宅の人気低下は、70年代がきっかけとなる。72年から73年の間に起きた第3次マンションブーム、77年から79年におきた第4次マンションブームによって、一般庶民も購入、及び入居可能なマンションが首都圏に次々と立ち始めた。60年代におけるマンションブームは、高所得者向けの住宅ということもあり、団地に住む住民とは関係のない出来事であったが、中間所得層にも手が届く金額のマンションが建つことは、団地住民の流

出の大きな原因となった(原,2012,pp.256-pp.257)。芝園町を有する川口市においてもその現象は発生し、60年代から80年代にかけて、駅前の地場産業である鋳物工場が姿を消した代わりに現れたのは、宅地開発による新たな住宅地と、高層マンション群であった。また、マンションに人気が出たのは、単なる住居の真新しさのみではない。マンションの特徴の1つに気密性の高さがある。基本として、マンションは自治会や集会というものは存在せず、団地特有の組合加入という煩わしさとは無縁である。たとえ管理組合のような団体が出来たとしても、加入は決して強制ではなく、隣人同士の付き合いを退けることや、プライバシーを保つことが団地と比較すると極めて容易であった。

また、団地自体の老朽化も大きな問題である。70年代に完成した芝園団地は、当然マンションから比較すると老朽化が進んでいる。当然 UR 都市機構はリノベーションとして、外壁の塗替えといった改装を適宜行っていった。しかし、外装の工事を行うことは容易ではあるが、内装の改装は決して容易ではない。2LDK、3LDK といった間取りは現在でも基本的な造りではあるが、元々の部屋が狭い上に、狭い部屋を組み合わせた古い造りは、新しいマンションと比較すると人気が高く、新たな入居者を呼びこむ要素としては不十分である。

そして、東京都心のマンション建設と同時進行で発生したのが、住環境を郊外から都心へと動かそうとする「都心回帰」の動きである。90年代前半、東京都23区への人口流入は減少の一途をたどっていた。しかし90年台中盤、芝園団地の日本人住民の減少が目立ち始めた時期に、23区への人口は増加へと変わっていった。同じようにマンションの数も増加していき、90年台初めから現在まで、着実に首都圏のマンション数は増加現象が続いている。また、マンションの価格にも変化が生じ、価格は一環として減少傾向にあり、買い求めやすい価格帯へと低下しつつある³。こういった首都圏のマンションを取り巻く環境も影響し、郊外の団地人気は低下し、日本人の住民はマンション暮らしへと移行しつつあった。

³読売 AD リポート(<http://adv.yomiuri.co.jp/ojo/02number/200306/06data.html>)
2013年11月30日閲覧。

第五章.ニューカマーの郊外化のメカニズム

第五章では1980年代以降、日本で増加した外国人、ニューカマーの郊外集住化のメカニズムについて論じていく。第四章で述べてきた芝園団地の事例のように、現在日本では、ニューカマーと呼ばれる層の外国人たちが、都心ではなく郊外の一部地域への集住化現象が確認されている。本項では、どういった要因に基づいて郊外化の現象が発生するのか、第四章で述べてきた芝園団地の事例と共に、その要因と背景について考察していく。

5-1.華人ニューカマーの郊外化の要因

1980年代以降、日本には新華僑と呼ばれる華人ニューカマーが大量に到来した。初めは彼等は、池袋を始めとする老華僑によって構成されているコミュニティへと身を寄せた。しかし、90年代から現在にかけて、彼等は都心ではなく郊外地域へと住居を移していった。その代表的な地域として挙げられるのが、第四章で述べてきた、埼玉県川口市の芝園町、及び芝園団地である。また、こういった中国人を始めとする外国人の集住現象は、芝園団地だけではなく、郊外に建ついくつかのマンションや集合住宅地等で確認されてくるようになった。

彼らが都内のマンションではなく、あえて郊外の住宅を選択するのには、いくつかの要因を挙げることが可能である。その1つが、彼等の生活水準の高さである。日雇労働を始めとする、劣悪な環境での労働や、ブルーカラーの中でも単純労働に従事する、労働力としての役割を期待されていたこれまでの在日外国人とは違い、新華僑と呼ばれる中国人の多くは、都内の企業にIT関係や技術職として就く、比較的高収入の層が多い。また、新華僑の夫婦の特徴として、子女教育に極めて強い関心を持つ場合が多い。第四章で述べた芝園団地のケースからも見て取れるように、彼等は、自身の子どもの教育について、他の親と交流しながら相談しつつ、情報を集めていきたいがために、芝園団地を住居として選ぶケースが多い。子女教育においても、多様なケースがあり、日本で生活しながら子どもを私立の学校へと通わせる場合や、中国の実家へと戻り本国で教育を受けさせる場合、または家族全員で日本以外の国へと移住し、その国のチャイナタウンで生活しながら、子どもを学校へと通わせる場合等が存在する。

こういった生活様式を持つニューカマー達にとって、郊外の住宅地は理想的な環境である。そして同時に、彼らが積極的に郊外地域を選んでいるのではなく、郊外の団地やマンションが、彼等にとっての一種の受け入れ先として機能していると考えられる。郊外に位置する公団住宅の特徴として、住民の慢性的な減少から、新たな入居者募集のためたとえ外国人でも、入居条件を軽くするという傾向にある。郊外地域に住む比較的高収入かつ、子女教育に強い関心を持つ新華僑たちは、先述したように、子どもの教育のために、国内はもちろん、

国外へと住居を移す場合も多い。そういった境遇を持つ彼等にとって、都内の通常のマンションを借りるために国籍を取得することや、またはマンションへの入居後、自治会への加入や近所とのネットワークは煩わしいものとして存在している。芝園団地を始めとする郊外地域で一部の団地では、在留資格のみで入居が可能であるため、将来的に国外へと移動する可能性のある新華僑たちにとっては都合が良いのである。たとえ、国内で子女の教育をする場合でも、都内の喧騒から離れることが可能であり、かつ首都圏へのアクセスの良い郊外住宅は、その立地や特性上、先述してきた華人ニューカマーの持つ特性や求める条件と合致するため、結果として郊外が彼等を受け入れるのに適している環境にあるがために、集住化現象が発生したと考えられる。

第六章.まとめ

6-1.論文概略

第一章では本論文の前提として、研究に至るまでの問題意識や研究背景、研究方法、論文構成と研究方法に関して論じた。

第二章では本論文の先行研究として、研究対象である在日中国人に関する研究結果を述べた。本論文の中心である、1980年代以降中国の開放政策によって日本へとやってきた中国人『新華僑』は、従来の在日外国人に付随する貧しいイメージとは対照的に、本国でもエリートの層であり、留学目的で来日した後、学んだ専門知識や技術を活かしながら日本の企業に勤めている。以前は池袋や新大久保といった、都内にすでに存在していた既存のエスニックコミュニティに身を寄せていた彼等は、次第により良い住環境を求めて都内のエスニックコミュニティから郊外へと移り始めた。その郊外地域の代表例が、川口市芝園にあるUR都市機構川口芝園、通称「芝園団地」である。

第三章では調査対象地である埼玉県川口市芝園町に関する先行研究について論じた。川口市は埼玉県南部に位置する特例市であり、人口50万人を超える、首都圏有数のベッドタウンである。現在のようなベッドタウン化が進んだのは1960年代以降、高度経済成長期に都市人口が一気に増加したことに由来する。それまでの鋳物づくりを始めとする地場産業は、急速に衰退を見せ、以前工場が無数に存在した川口駅東口周辺は、現在は高層マンションや宅地が並ぶ、一大ベッドタウンとして生まれ変わった。芝園町は市の南西部に位置する町であり、町内のすべてをUR都市機構の芝園団地が占めている。1978年に団地が完成する以前は、巨大な新幹線工場が存在するだけの町であったが、団地が建って以来はベッドタウンとしての性格を強めていった。建設当時は抽選でないと入居することが出来ないほどの人気物件であったが、周辺地域のマンション人気や老朽化の問題などから人気は低下、2013年現在も人口流出が大きな問題となっている。一方でこの芝園団地は、人口が急激に減りだした90年代から、中国人の集住化が大きな問題点となっている。そこに住む中国人を頼りにと、増々多くの中国人を集める環境が完成されつつあり、町内の総人口が減少しながらも、中国人の人口は年々増加傾向にある。日本人住民と中国人住民との軋轢も数多く存在し、ゴミの分別・駐輪場の管理・騒音問題と、多くの問題を抱える地域でもある。

第四章では、芝園町が現在の中国人の街へと変化したその過程とメカニズムについて論じた。芝園団地に中国人が集住するのに至った理由としては大きく3点が存在する。1つが芝園団地は現在人気の低さから、新たな入居者を募集するために、厳しい入居制限を特に設けておらず、結果として在留資格のみで外国人も入居可能であることから、結果として入居可能なマンションが少ない中国人を受け入れるような形で集住化が発生したこと。2つは

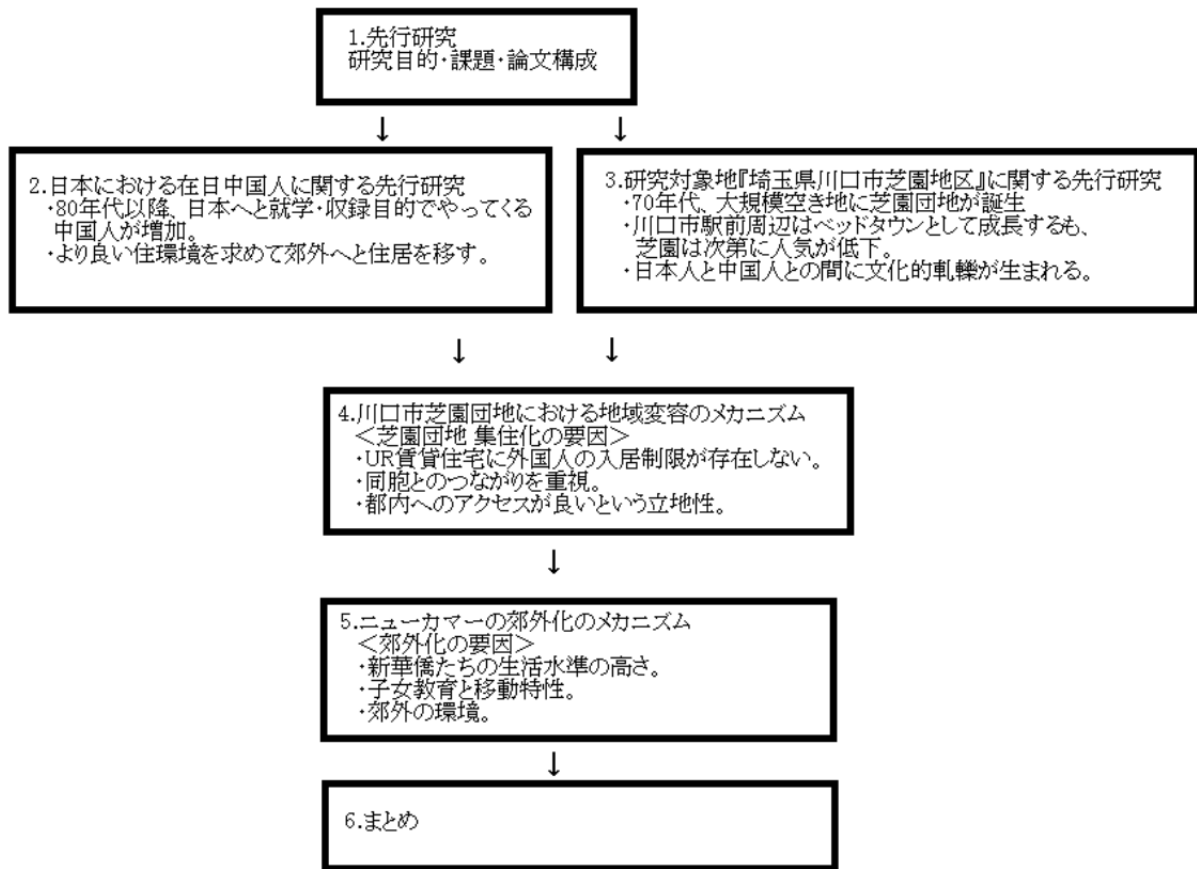
中国人が地縁を始めとする、同胞とのネットワークを非常に重視しており、また子女教育に極めて強い関心を持つ彼等が、他の親たちと情報交換することが可能なため、それらを頼りにして芝園へと集まってきたこと。3つが芝園団地の立地条件が、彼等の生活様式と合致していることである。都会の喧騒から離れるような形で郊外へと居住地を移してきた彼等にとって、芝園団地は都内へのアクセスが良く、かつ周辺に生活に必要なインフラの多くが揃うその立地は、非常に魅力的なものである。

また、芝園が現在の状態へと変容した過程を見ていくためには、日本人の流出も大きな問題点である。90年代中盤から日本人が芝園から離れていったのには、単に芝園が外国人が増加したことや老朽化といった「内的」な問題だけではなく、「外的」な問題が大きく関係している。70年代後半から、団地の人気が少しずつ下がるとともに、首都圏にはマンションの建設ラッシュが始まった。90年代中盤には都内の地価が下がったことから、比較的安価な購入しやすいマンションも登場したことにより、郊外地域の団地では、人口流出が顕著となった。以上が芝園団地の地域変容の概要である。

第五章では華人ニューカマーの郊外化現象について論じた。芝園団地はもちろん、首都圏郊外に位置するいくつかの団地では、外国人の集住化現象が発生している。地価が下がり生活環境も少しずつ良くなりつつある都内ではなく、なぜ外国人達は郊外の集合住宅を居住先として選択するのか。そこには、ニューカマーの持つ特性や、彼等を取り巻く環境が大きく作用している。子女教育に極めて強い関心を持つ彼等は、子どもを中国で教育するために本国へと帰郷し、または日本以外の国へと移住するなど、極めて移動性が高い。そのため彼等は国籍を取得せず、あえて在留資格を得ながら日本で生活している。郊外の団地は在留資格のみで入居可能な上、都内への通勤通学が可能な比較的閑静な地域であることから、比較的高収入のニューカマー達を集めるのに至った。

第六章では本論文のまとめとして、論文の概略・謝辞・本研究の意義を述べた。

6-2. フロー図



6-3. 謝辞

本論文の執筆、および研究を行うにあたって、ご指導を賜りました浦野正樹教授、ならびに適宜アドバイスを下さった地域・都市論ゼミ2の同期の方々、突然のインタビューに協力してくださった芝園団地自治会関係者の方々、川口芝園公民館関係者の方々に深く感謝致します。

川口市芝園町を研究対象地として選定したのは、筆者自身が川口市で幼い頃から生活しながらも、芝園町ならびに芝園団地の変容とその問題に関しては、ほとんど感じることもなく、また同地域の知識も薄かったため、研究を通じて川口市の重要な一面を知ると共に、自身の住む街の将来を探ることが出来るのではないかと考えた結果である。

芝園団地の特性上、住民に対しての積極的なインタビューを行うことができず、中国人住民たちの声を直接聞くことは出来なかった反面、芝園団地自治会関係者の方々、および川口芝園公民館関係者の方々にお話を伺うことによって、表面化しづらい芝園団地のコミュニティや問題点を詳細に知ることが出来ました。団地の地域変容を扱う以上、欠かすことの出来ない内部コミュニティの様相を本論文の研究内容に組み込むことが出来ました。調査にご

協力いただき、非常にありがたく存じます。

以上をもちまして、本論文執筆の謝辞とさせていただきます。

6-4.本研究の意義

国際化社会の到来は、日本に多くの変化をもたらした。地域社会も例外ではなく、外国人の集住化により、多くの地域が新たな地域問題を抱えるようになった。

埼玉県川口市芝園団地は90年代以降、急激に中国人と街としての性格を強めていった地域である。生活文化の違いから、依然として日本人住民との間に軋轢が生じており、大きな問題となっている。国際化社会がこれからも進む中、芝園団地以外の郊外住宅は、第二・第三の芝園団地になる可能性を秘めている。

本研究は外国人との共生や移民問題を中核に置くのではなく、ニューカマーの郊外化現象がどういったメカニズムに基づいて発生するのか、またその問題点の解明を中心に置いた。外国人をめぐる地域問題は、コミュニティ内で起きる問題や外国人の持つ特有の問題が論点の中心になることが多い。しかし、芝園団地の集住化においては、新華僑の持つ特有の問題を始めとする「内的」な問題だけではなく、郊外地域の住宅の抱える現況や、首都圏のマンションの建設といった「外的」な問題が大きく関係している。ニューカマーの関係する地域問題を解決するためには、内部にのみ視点を置くのではなく、彼等やその地域を巡る、外部の問題を注視する必要があると、本論文での研究結果から論じることが可能である。

参考文献リスト

<参考文献>

PHP 研究所『数字で見る 戦後50年 日本のあゆみ』PHP 研究所1995年1刷。

岩崎信彦、矢澤澄子『地域社会学講座第3巻 地域社会の製作とガバナンス』東信堂2010年2刷。

可児 弘明 斯波 義信 遊 仲勲『華僑・華人事典』弘文堂2002年1刷。

川口市史編さん室『川口市近代史年年表稿』巧和工芸印刷株式会社1980年1刷。

江衛 山下清海「公共住宅団地における華人ニューカマーズの集住化-埼玉県川口芝園団地の事例-」『人文地理学研究29』2005年

古城利明『地域社会学講座第2巻 グローバリゼーション/ポスト・モダンと地域社会』東信堂2006年1刷。

清水宏吉・清水睦美『ニューカマーと教育 学校文化とエスニシティの葛藤を巡って』明石書店2001年1刷。

菅原幸助『日本の華僑』朝日新聞社 1991年1刷。

須山卓、日比野丈雄、蔵居良蔵『華僑 改訂版』NHK ブックス1979年 5刷。

譚?美、劉傑『新華僑 老華僑 変容する日本の中国人社会』文藝春秋2008年 1刷。

日本労働機構『外国人研修生送り出しシステム-中国編-』芳文社1995年1刷。

原武史『団地の空間政治学』NHK ブックス2012年1刷。

広田寿子『華僑のいま』新評論 2003年1刷。

山下清海『池袋チャイナタウン』洋泉社2010年1刷。

山下清海『チャイナタウン 世界に広がる華人ネットワーク』丸善ブックス2008年4刷。

山下清海編『現代のエスニック社会を探る 理論からフィールドへ』学文社2011年 1刷。

山下清海 小木裕文 松村公明 張貴民 杜国慶「福建省福清出身の在日新華僑とその僑郷」『地理空間3-1』2010年。

吉原和男『現代における人の国際移動-アジアの中の日本』慶應義塾大学出版会2013年1刷。

『読売新聞 埼玉版』2010年 5月4日 朝刊。

李国梁,2002,五縁関係可児弘明・斯波義信・遊仲勲編:「華僑・華人事典」弘文堂。

<参考 URL>

・「川口市/かわぐちの人口第5表町丁字別人口」

(<http://www.city.kawaguchi.lg.jp/kbn/04013021/04013021.html>) 2013年11月30日閲覧)

・「読売 AD リポート」

(<http://adv.yomiuri.co.jp/ojo/02number/200306/06data.html>) 2013年11月30日閲覧)